The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	スポーツを用いたHIV/AIDS啓発 : ジンバブエの事例からみる特徴
Author(s)	岡田, 千あき
Citation	大阪大学大学院人間科学研究科紀要. 2013, 39, p. 107-123
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/24786
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

スポーツを用いたHIV/AIDS啓発

－ジンバブエの事例からみる特徴－

岡　田　千あき

目　次

１．はじめに
２．スポーツを用いた HIV/AIDS 啓発の分類
３．調査の概要
４．調査結果
５．結論 (HIV/AIDS 啓発におけるスポーツの有効性)
６．おわりに

大阪大学大学院人間科学研究科紀要 39；107-124（2013）

スポーツを用いたHIV/AIDS啓発
－ジンバブエの事例からみる特徴－

岡　田　千あき

１．はじめに

近年のHIV/AIDSは、単なるウイルスや病気の名称としてではなく、人類が共同で立ち向かうべき地球規模の課題の一つと認識されている。HIVに感染しても抗ウイルス薬の継続服用によってAIDSの発症を高確率で抑制することが可能となり、AIDSは、感染イコール「死」を意味する不治の病ではなくなった。しかし、一方で、HIV感染者やAIDS患者の有する文化、宗教、経済などの社会的背景や個々の属性に起因する様々な問題が明らかになり、具体的には、HIV陽性者の中に命の危険や生活の質が低下せず感染前とほぼ変わらない生活を送れる者とそうでない者の両者が生まれ、その差は年々、極端なものとなっている。現代のHIV/AIDS問題の真の怖さは、私たち人間が作り出した社会的要因に個人の命や生活の質が容易に左右されることである。

2010年時点の世界のHIV感染者数は3,400万人で、そのうち14才以下の子どもの感染者は340万人と言われている。地域別ではサブ･サハラ･アフリカ2,290万人、東･東南アジア400万人、中央･ラテンアメリカ150万人、東ヨーロッパ･中央アジア150万人、北アメリカ130万人、ヨーロッパ84万人、西アジア79万人、北西アフリカ47万人、カリブ20万人、オセアニア5万4,000人とアフリカでの感染者数が多いのが特徴である[1]。HIV/AIDSに起因する死者数は、近年は減少傾向にあるものの年間180万人に上り、14才以下の子どもの死亡も26万人に上る。

HIV陽性確認後に抗ウイルス薬の服用を始めとする適切な治療を受けられる人の割合が2009年末には36%に達した。一方で、2011年末現在でも年間250万人の新規感染者が生まれており、国によっては成人の28%がHIVに感染していると言われている。現実には、HIV検査の未受検者やHIV陽性が判明していても国籍を持たない、住民登録をしていない、親が外国籍などの理由によって、国家統計に含まれていないHIV陽性者も多数存在する。そのため実際のHIV感染者数は統計以上になると言われており、国によっては人口の25-30%、3、4人に1人がHIV陽性者であると推測されている。3、4人に1人というと、国民の多くが家族の誰かを亡くしているか闘病中、治療中の状態にあり、特にその者が主として生計を支えている場合や子どもの養育者である場合には、複数の人々の日々の生活の質や生命の維持にも関わる深刻な事態を引き起こしている。

HIV/AIDSにより片親あるいは両親を亡くした孤児の数は、2009年には1,660万人に上っており、その内89%がサブ･サハラ･アフリカの子どもたちである。孤児は一般的には親族に引き取られるが、受け入れた親族も経済的に困窮している場合が多く、学費や生活費の

新たな負担増は深刻な問題である。これらの孤児のケアは、家庭の問題とみなされる傾向にあり、引き取られた孤児が、やむなく家事労働や時には賃金労働に従事させられる例が散見されている。家族を亡くした子どもが、精神的な安らぎを得られないばかりか、最低限の生活や教育を受ける基盤さえも失ってしまうのである。ベラミーは、「AIDS孤児やHIV/AIDSが原因で危機にある子どもたちの問題は、規模が拡大し、深刻化し、長期間に渡るものとなっています。しかし、HIV/AIDSによって最も困難な状況下にある国のうちの3分の2は、この危機にある子どもたちが最低限の保護と養育を受けられるようにするための戦略さえ持っていません」[2)]と述べている。AIDS孤児の場合、本人が母子感染によりHIV陽性である可能性が通常より高いが、様々な理由からHIV検査を受けておらず、治療の開始が遅れることも多い。

これらの社会的、国家的とも言える課題を抱え、近年では、HIV/AIDSを疾患と捉えて検査や治療を推進するのみでなく、開発戦略の一部としてHIV/AIDSに関する啓蒙･啓発･教育(以下、HIV/AIDS啓発)を行う必要性への認識が高まっている。予防医学的観点からHIV感染を防ぐ目的で行われる啓発のみでなく、社会課題に取り組む姿勢を涵養するHIV/AIDS啓発の必要性は、AIDSが不治の病とされていた時期と変わらないか、更に高くなっているのが現状である。

これらの背景を踏まえて、本研究では、新規感染者数の劇的な減少が国際的な注目を集めている南部アフリカのジンバブエで行われている「スポーツを用いたHIV/AIDS啓発」を取り上げる。まず始めに世界各国で行われているスポーツを用いたHIV/AIDS啓発活動を参考資料として形態別に分類し、その特徴を明らかにする。続いて、ジンバブエ野球連盟が行う啓発活動の考察から、スポーツを用いることによるHIV/AIDS啓発の特徴を導き出し、他の手法と比較した「啓発活動にスポーツを用いることによる有効性」を明らかにすることを目的とする。

２．スポーツを用いたHIV/AIDS啓発の分類

HIV/AIDS啓発に求められる内容の変化に伴って、スポーツを活用する動きが注目を集めている。国連合同エイズ計画(The Joint United Nations Programme on HIV and AIDS: UNAIDS)代表のピオットは、「4,000万人のHIV陽性者の3人に1人は25才以下の若者であり、彼らの多くが観戦者あるいは参加者としてスポーツに関わっています。若者がHIVに関する情報にアクセスすることは絶対的に重要であり、それによりHIVに感染することなく健康で生産的な人生を送ることができるかもしれません。スポーツ界は、村、街、世界の区別なく若い男女に接触することが出来るという意味で重要なパートナーです」[3)]と述べており、スポーツに触れる機会が多い「若者」に対する情報発信のハブとしての役割が期待されている。本章では、このことを踏まえてHIV/AIDS啓発の形態を分類し、活動の特性や期待される効果を述べる。

2-1. スポーツに関するHIV/AIDS啓発

スポーツを用いたHIV/AIDS啓発の中で最も広範な対象を定めたものとして、HIV/AIDSやスポーツに関わる国際機関による活動が挙げられる。国際オリンピック委員会(International Olympic Committee: IOC)とUNAIDSは、2004年に連携協定を結び、その後、南アフリカにおいて「若者に対するスポーツを通じたHIV/AIDS啓発」と題するワークショップを開催した。2005年には、2機関合同でHIV/AIDS啓発のための“Toolkit on HIV&AIDS Prevention through Sport”を開発し、英語、フランス語、ポルトガル語、スペイン語、ロシア語、中国語、スワヒリ語に翻訳され世界各地で活用されている。また、2010年のFIFAワールドカップ南アフリカ大会では、国連開発計画(United Nations Development Programme: UNDP)、国際協力機構(Japan International Cooperation Agency: JICA)、SONYなどが行ったHIV/AIDS啓発が注目を集めた。この種の活動は、大規模スポーツイベントの場を中心に行われており、HIV/AIDSやスポーツに関わる国際機関や国際NGO間の連携を基盤としていることが多い。

その他にもユニセフや各国オリンピック委員会、様々な競技団体などによってHIV/AIDS啓発が展開されている。一部の活動では、一流競技者をロールモデルとしたり、HIV/AIDS啓発に関わるスローガンを印字したボールを配布したり、映画や演劇とスポーツを組み合わせて啓発を行うなど、「HIV/AIDS×スポーツ」に関わる新しくユニークな発想が見られている。

毎年、12月1日は「世界エイズデー」であり、複数の国際機関やNGOがスポーツイベントを実施している。イベントには様々な種類があり、主に先進国で開かれるチャリティ色の強いものと、主に開発途上国で開かれるHIV/AIDSに関する細かな情報を発信するものに分類される。さらに形態も講演会やワークショップを開催するもの、スポーツの場を提供するもの、その両者というパターンが見られる。これらは、実施団体がHIV/AIDS関連か社会開発関連かスポーツ関連かによっても異なり、いずれの形態の場合も、広義にはスポーツを用いてHIV/AIDS啓発を行う活動である。これらの啓発の効果の測定は困難であるが、特に若者を対象とした活動が多くみられるため、HIV/AIDSに関する認識の向上や差別や偏見の解消といった長期的な目的達成に一定の効果があることが推測される。

2-2. スポーツの場におけるHIV/AIDS啓発

スポーツを用いたHIV/AIDS啓発の中で最も一般的なものは、スポーツの場において啓発活動が行われるものである。この種の活動は、ケニアの“Mathare Youth Sports Association”[4)]がさきがけと言われている。HIV/AIDSは性に関する内容に直結するため、特に若者世代では、家族や友人間で「真面目に」話すことに困難を感じる者が多い。本研究で事例とするジンバブエにおいても、親子間で性的な話をする機会は非常に乏しく、コミュニティ内の重要な情報発信機能を担う教会においても性に関する話題はタブーである。政府は学校におけるHIV/AIDS啓発を奨励しているが、教師の多くは専門的な知識を持たず、

また性に関する内容を授業で扱うことに対して心理的な障壁を持つ場合が多い。

社会的、宗教的、教育的な様々な理由から広範な啓発の困難さは理解に難くないが、人々がHIV/AIDSに関する理解を深め、新規感染を抑えながらHIV/AIDSと共存する社会を作ることが急務である。スポーツの場における啓発は、HIVの新規感染やAIDSの発症を抑えるのみでなく、HIV/AIDS問題を正しく理解している人材の増加のために極めて重要な活動の一つである。

スポーツの場における啓発活動を行うNGOは増加傾向にあり、特にHIV感染率の高い中南部アフリカでのサッカーを用いた活動が多くみられる(表1)。また、近年では、各国政府がUNAIDSや国連機関の支援を受けて行っている活動も多い。本研究で取り上げるジンバブエ野球連盟の活動も国内外の様々な団体の支援の下で行われているものである。

表 1　主な NGO によるスポーツの場における HIV/AIDS 啓発活動の例

団体名	主な活動地	設立年	行われるスポーツ
Mathare Youth Sport Association	ケニア	1987	サッカー
Sports Coaches Outreach	南アフリカ	1991	複数
Kick It Out	南アフリカ	1993	サッカー
Hoops 4 Hope	南アフリカ	1995	バスケットボール
Sport in Action	ザンビア	1998	サッカー
Edu Sport Foundation	ザンビア	1999	複数
Vijana Amani Pamo ja	ケニア	2001	サッカー
Magic Bus	インド	2001	複数
Africaid	南アフリカ	2002	サッカー
Grassroot Soccer	ジンバブエ	2002	サッカー
Nawalife Trust	ナミビア	2003	サッカー
Coaching for Hope	ブルキナファソ	2004	サッカー
Kick 4 Life	レソト	2005	サッカー
Albion in the Community	マリ	2005	サッカー
TRIAD Trust	アメリカ	2007	ｻｯｶｰ、ﾊﾞｽｹｯﾄﾎﾞｰﾙ
HIV Sport	南アフリカ	2007	複数
Foundation of Hope	ザンビア	2007	複数
Show Me Your Number	南アフリカ	2009	サッカー

2-3.　運動に組み込まれるHIV/AIDS啓発

近年、一部の団体が、HIV/AIDSに関連する内容を組み込んだ独自の運動やゲームを考案している。HIV/AIDS啓発に関するネットワークである“Kicking AIDS Out(KAO)”は、2001年

にケニアで始められたHIV/AIDS啓発をベースとした活動の総称である[5]。2002年からは、経験をまとめる試みが開始されており[6]、“Kicking AIDS Out –Through movement games and sports activities–”では、各国で使用された運動やゲームの一部を図解付きで紹介している(図1)。

これらのゲームでは、HIV/AIDS啓発の一部の内容を運動と組み合わせることにより、参加者が身体を動かしながら学ぶための工夫がなされている。一つのゲームのテーマは1つか2つに絞られており、参加者の人数、年齢、性別、場所、用具などによってルールや学び方を変えて活用することが可能である。

図1　ゲームの例「障壁をくずせ」

名称：障壁をくずせ　**ローカル名**：なし　**ライフスキル的目標**：HIV/AIDSについて話すための文化的障壁を取り除く方法を導入する　**スポーツスキル的目標**：投てき技術の向上

場所：中規模の空き地、屋内･屋外　**人数**：10人以上　**対象**：女子、男子　**用具･物品**：牛乳ボトル(プラスティック製)、ボール

概要:このゲームの目的は制限時間内(1回5分まで)に相手チームの文化的障壁(牛乳ボトル)をチームで協力してできるだけたくさん倒すことです。プレーヤーは、ボールを投げる時、止める時にその時にいる場所から1歩だけ動くことができます。両チームとも中央のラインを超えることはできません。ボールを相手チームの文化的障壁を倒すために投げるかころがして下さい。プレーヤーは、相手チームのボールが自チームの牛乳ボトルに当たる前に足を使って止めなければなりません。ゲームの終了時により多くの相手側の文化的障壁を倒していたチームが勝ちです。

レベルの変更(の可能性):
-プレーヤーの数の増加/減少?
-ボールの数の増加/減少?
-ボールを止める際の足の動きの制限?

ゲーム終了後の活動:
ゲーム終了後に、HIV/AIDS啓発に関わる文化的障壁とは何かについて議論して下さい。これらの障壁をくずすための活動について皆で話し合いましょう。例えば、コンドーム使用を取り巻く文化的障壁について、年少の子どもたちに伝えるパペットを作成するといったことにつなげることができるでしょう。

→　新しいゲームへの展開
- ゲームをする場所を広くしたり狭くしたら?
- ゲームをジェンダー差別によって作られた障壁をくずすことを教える内容にしたら?
-ボールを投げる代わりに蹴るようにしたら?

→　おすすめの点
このゲームは、体育授業の一部にもカリキュラム外の活動にも活用できます。通常の練習の後のクールダウンの際の活用も可能です。

出典：The Kicking AIDS Out Network (2004) “Kicking AIDS Out -Through Movement Games and Sports Activities-”を筆者訳

しかし近年、スポーツ団体がこれらの教材を扱うことに対して、HIV/AIDS啓発の効果は上っても運動の質が担保できないのではないか、という疑問が呈されている。ゲームや運動の中にHIV/AIDSに関する事柄を溶け込ませることに成功したからと言って、それ

がスポーツ分野からの視点、すなわち技術、体力、戦術などの向上に寄与しないという声が現場の指導者から発せられたのである。このことは同時に、「私たちは全てスポーツ団体としてスタートしましたが、予算の獲得に走るあまりスポーツを忘れて開発団体に変わってしまいました」[7]と評されるように目的としてのスポーツが手段としてのスポーツに継時的に変化する「スポーツの開発化」によって招かれた副作用とも言える。スポーツ団体が行う開発活動が常に抱えるジレンマでもあり、近年、熟議が必要とされている複合的な課題であるため、本研究では深くは触れずに議論を別稿に譲る。

スポーツを用いたHIV/AIDS啓発には、短期間に多くの開発援助機関、スポーツ団体が関わるようになり、その効果に対する疑問が呈されつつも新たな展開を続けてきた。特にアフリカにおいてHIV/AIDSへの危急の対応が求められていることから、成果の吟味に先行して現実的な活動が優先されたのが実態である。このことは、スポーツを用いたもののみでないHIV/AIDS啓発全般に共通しており、今後は、成果の検証を元にしたより効果的なプログラムの策定が求められる。

３．調査の概要

3-1. 背景

南部アフリカに位置するジンバブエでは、これまでのAIDSによる死亡者が8万3,000人に上っており、出生時平均余命が42才と世界で最低水準にある。15才～49才の成人のHIV感染は人口の14.3%、17才以下のAIDS孤児が100万人と推定されている[8]。成人のHIV感染率は2006年の18.1%から減少しており、それまでの感染者数は、死亡者数を除くと変化がないことから、新規感染者数の劇的な減少が国際的な注目を集めている[9]。教育水準の高さなどの理由からHIV/AIDS啓発の高い効果が認められている一方、ジェンダー格差や性知識の伝播が宗教的タブーに触れるなど、HIV/AIDS啓発を阻害する要因もすでに明らかになっている。いずれにしてもHIV/AIDSが社会の根幹を揺るがす課題となっている国の一つであり、HIV/AIDS啓発を含めた包括的なHIV/AIDS対策が国の未来を左右する差し迫った状況にある。

3-2. 対象、期間、方法

文献研究と現地調査を併用した。調査地は、首都のハラレ、ブラワヨ、マシンゴ、グエルの各都市およびその近郊部、調査対象は、ジンバブエ野球連盟会長ほか連盟スタッフ5名、ジンバブエ教育省スポーツレクリエーション委員会委員長ほか関係者7名、HIV/AIDS関連団体スタッフ9名、スポーツを用いたHIV/AIDS啓発を行うNGO関係者4名、野球クリニック実施校の教員およびコーチ8名の計33名であった。調査期間は、2011年3月(ジンバブエ野球連盟会長の来日時)および、2011年9月11日～9月16日(ジンバブエにおける現地調査)に加えて、2010年3月～2012年4月にかけてジンバブエ野球連盟と継続的なメール連絡を行った。調査方法は、個別インタビュー調査と参与観察法の併用とし、個別インタビュ

ーは、上記の対象者に対して平均2回ずつ英語で行い(3回以上、1回の対象者も有)、インタビュー内容及び、参与観察中の打ち合わせの模様などは、被調査者の同意を得た上で録音し翻訳した。

4．調査結果

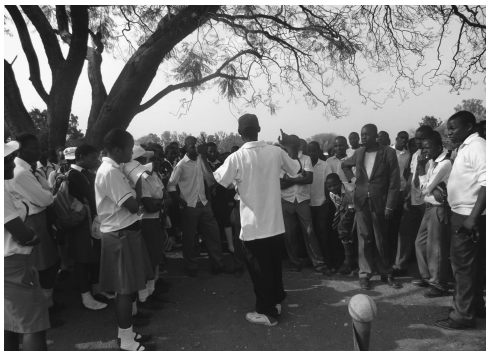
4-1. ジンバブエ野球連盟によるHIV/AIDS啓発

ジンバブエ野球連盟は、複数の学校やNGOと協力し、野球の普及活動と共にHIV/AIDS啓発を行っていた。野球の練習および試合の間の休憩時間や終了後の時間に、HIV/AIDS啓発の担当者がグランド内の空きスペースに参加者を集め、1回につき30分から40分間程度、HIV/AIDSに関わる様々な話がなされていた(表2)。野球という競技特性から男子の参加が多いことが予想されたが、参加者の男女比は5対5か6対4で男子の参加がわずかに多い場合がほとんどであった(写真1)。

表2　ある1日の活動内容

9:00	挨拶・準備		
9:30	クリニック開始,準備運動		
	【コート1】	【コート2】	
10:00	小学生1	小学生2	
11:00	小学生1,2	中学生1	
12:00	指導者	中学生2	中学生1啓発
13:00	指導者	中学生1,3	中学生2啓発
14:00	指導者	中学生2,4	中学生3啓発
15:00	中学生3	中学生4	
			中学生4啓発
16:00	クリニック終了		

写真1　HIV/AIDS啓発活動の様子



啓発活動において話される内容は、参加者の雰囲気や態度を見ながら少しずつ変えられるが、基本的な流れとしては、①自分たちの進路や将来をどう考えるか、②ジンバブエの国の将来をどうしていくべきか、③現時点で重要な国内の問題は何か、④HIV/AIDSの現状、⑤国の将来を担う人材としてHIV/AIDS問題にどう立ち向かうか、⑥自分の身近にあるHIV/AIDSにまつわる課題にどのように対峙するか、と順を追って進められていた。話の中では、HIV/AIDSの原因や感染経路といった一昔前によく見られた「HIV/AIDSの知識」にはほとんど触れられず、自分や国の将来に関するマクロな視点からのHIV/AIDS問題の捉え方と、参加者の生活に密着したミクロな視点からのHIV/AIDSへの対処に焦点が絞られていた。そのため、参加者は話に引き込まれやすく、同時に、例えば「スポーツ用具をシェアすることによるHIV感染の危険はありますか」や「HIV感染者はどのくらいの確率でAIDSを発症しますか」といったHIV/AIDSの知識に関わる点で疑問が残り、後に設けられる質疑応答の時間にこの種の様々な質問がなされていた。最後のメッセージと

して「HIV検査で陰性とされた者以外は陽性である」と伝えられ、全ての参加者に対して早急なHIV検査の受検を促し、啓発が締めくくられていた。

4-2. ジンバブエ野球連盟によるHIV/AIDS啓発活動の特徴

ジンバブエ野球連盟の普及活動のように、スポーツの場に参加者、指導者、運営者などが集まることは不自然ではなく、その場で話されるHIV/AIDS、性や生殖に関する話題には抵抗感を持つ者が少ないように見受けられた。啓発活動は、野球を教えてくれる身近な他者、すなわち「親近感を持ちやすい」外部者によって行われており、参加している仲間と共に問題を認識し、解決への道程を模索することを可能にする。時に「真面目な遊びの場」と捉えられるスポーツが、人々の生活に密着しながらも一時的な非日常の場として機能し、行われるHIV/AIDS啓発活動の効果を最大化していると推測される。スポーツの場を用いて、HIV/AIDS、性と生殖、人権などに触れることは、人々、特に若者が、これらを自分の生活の中で「身近で日常的なもの」と再認するきっかけとなり得るのではないか。

現在のジンバブエ野球連盟の活動は、野球の「普及」を目的としているため、常に新しい参加者が多いことも特徴の一つである。野球は、ジンバブエ国内では新しく、直接的な身体接触が少ないスポーツであるため、既に人気スポーツであるサッカーやバスケットボールなどと比較すると女子の参加が多い。また、連盟が普及の対象としているのは、小学校高学年～高校生(10才～18才位)であり、HIV/AIDS啓発が対象とすべき年齢層とほぼ同じである。これまでに行われていた病院、ヘルスポスト、エイズクラブなどでの啓発活動では、「本来、ターゲットとしたい活発な若者」に対するアクセスの機会が限られていた。HIV/AIDS啓発を担うべきコミュニティ、教会、学校が役割を果たせない現状を鑑みると、スポーツの普及の場が、効率的に対象者を絞りうる可能性を持つことは疑いの余地はない。

スポーツは、行われている場に人を引き付ける特性を持っており、参加者、観戦者、運営者、指導者など役割は異なるが、多くの人々が一定の時間を共に過ごすことを可能にする。ジンバブエ野球連盟の啓発活動に関わるカパチャオは、「スポーツの場以外で子どもたちを長い時間、退屈させずに引き付けておくのは困難です。通常のHIV/AIDS啓発であれば、10分も話をすれば飽きてしまいます」[10]と話している。スポーツ活動の規模にもよるが、一部のスポーツの場におけるHIV/AIDS啓発では、集める人数に対する費用対効果の良さが利点として評価されている。より多くの主体的な理解者を、より低いコストで集めることは、HIV/AIDSに関わらず様々な啓発活動を成功させるための必須条件である。

このようにスポーツの特徴を活かす形でHIV/AIDS啓発が行われているが、一方で、一部の国においては、HIV/AIDS問題の差し迫った深刻さから、開発に関わる全ての分野や関係者がHIV/AIDS対策を避けて通れないという現実があることは看過できない。スポー

ツ関係者や開発関係者が、HIV/AIDSに関する課題解決に対して「スポーツにできること」を模索した結果として、多様なレベル、内容、方法でHIV/AIDS啓発が行われているのも歴然とした事実である。

5. 結論　(HIV/AIDS啓発におけるスポーツの有効性)

2000年代までのHIV/AIDS啓発は、“ABC”と言われる3つの基本を中心に行われてきた。Aは、Abstain from sex(禁欲)、BはBe faithful to one partner(貞操)、CはCondom(コンドームの使用)を示している。現実には、性交渉時のコンドームの使用による新たなHIV感染の防止が最重要とされ、コンドーム使用の啓発や無料配布が世界各国でなされた。未だコンドーム使用は、HIV/AIDS啓発の基本であるものの、現代の啓発活動で中心となる内容は変化しつつある。

近年のHIV/AIDS啓発では、①HIV検査の受検率の向上、②HIV陽性判定後にAIDSの発症を抑えるための知識の普及、③HIV/AIDSに対する偏見や差別の根絶、などが目的とされ始めた。扱われる内容も医学的観点からHIV/AIDSの予防法や症状を伝えるのみでなく、受講者に様々な行動変容を促すものへと変化している。近年、多くの国や国際機関が採用しているHIV/AIDS啓発における「ライフスキル」の導入もこの考えに基づいており、受講者に具体的な行動変容を期待するものが多い。ライフスキルとは、「個人が、日々の生活における要求や問題に効果的に対応するために必要な適切かつ積極的にふるまう能力」[11]と説明され、文字通り「生きるための技術」である。個人が日々の生活における満足度を高めるために求められ、時には地域ごとに異なる生活の基本や人間関係の構築のための技術を意味している。

HIV/AIDS啓発におけるライフスキルとは、前述の目的を達成する基礎となるものであり、WHOは「他者との健全な関係や効果的なコミュニケーション、責任ある判断のために必要な知識と技術」[12]と説明している。勝間は、HIV/AIDS啓発とライフスキルの関連を具体的に示しているが(表3)、スポーツを通じたHIV/AIDS啓発においても自身の健康や身体、ライフスキルへの関心を高めることが期待される。同時に広い意味でのスポーツの場では、身体、健康の他に、コミュニケーション、ジェンダー、差別といった概念への配慮が求められており、これらはHIV/AIDS啓発においても重要な要素である。スポーツを用いた非言語コミュニケーションの場において、他者や多様性の尊重、ジェンダー差別の解消、マイノリティへの配慮などの日常生活で身につけることが困難なライフスキルを養える点は、一般的なHIV/AIDS啓発とは異なるスポーツを通じた啓発活動の大きな特徴である。

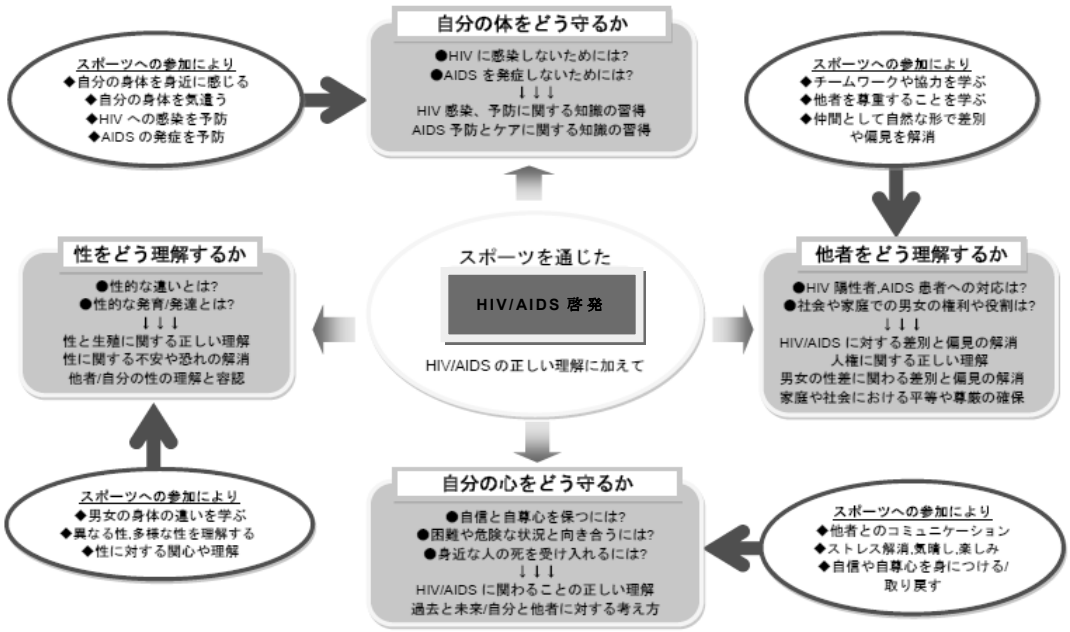
表3　HIV/AIDSとライフスキル

	ライフスキルの内容	事　　例
ライフスキル 1	意思決定	エイズで倒れた両親の世話をするため学校に来なくなった友達について、どうしたら手助けできるか相談して決める。
	問題解決	年長の少年のグループが、少女に対して叫んだり、脅かしたりした。この少女は、次に同じことが起こった場合、どう対応すべきか考えている。
ライフスキル 2	批判的思考	少女が 1 人で歩いていると、知らない男が車で送ろうと言ってきた。少女は、危険だと考え、その誘いを断った。
	創造的思考	HIV 陽性の少年は、将来の仕事の選択肢を挙げ、その仕事を得るためには何をすべきか熟考する。
ライフスキル 3	コミュニケーション	子どもが、自分の叔父さんが HIV 陽性だということで恐怖心を抱いていた。その恐怖心について、両親や兄に伝え、相談することができた。
	対人関係	友達たちから、週末、一緒にナイトクラブへ行って、飲もうと誘われた。断るとからかわれることは分かっていたが、仲間からの圧力に屈せず、NO と言った。
ライフスキル 4	自己認識	少女が自分の性的欲求を意識し、それによって合理的な判断が鈍るかもしれないと認識するようになる。このような自己認識は、無防備な性交渉の危険に面するような状況を避けることに役立つ。
	共感	どうしたらエイズ孤児を手助けできるだろうかと、子どもたちのグループが考える。
ライフスキル 5	ストレスと感情への対処	少女が、自分を性的に虐待した父親に感じている憤りへの対処の仕方を学ぶ。同じような生活環境に置かれた子どもたちが、それぞれの経験を共有しながら苦悩に対処しつつ、積極的に生きていくための目標を設定する。

出典：勝間靖(2007) 「教育と健康－HIV/エイズを中心として－」国際開発学会

図2では、現代のHIV/AIDS啓発で重視されている4つのカテゴリーについて、「スポーツを用いて行う意義」を示した。

図2　HIV/AIDS啓発にスポーツを用いる意義



6．おわりに

各国政府や国際機関、NGOなどの懸命な取り組みにも関わらず、特にサブ･サハラ･アフリカにおけるHIV/AIDS問題は収束の兆しを見せていない。AIDSが死に直結する病ではなくなった現代においても、多くの国では、新規感染の防止、医薬品の適切な配布と服用、AIDS孤児への対応などの国の根幹にかかわる課題への喫緊の対応が求められている。十分な予算や医薬品が国内にあっても行政による配布が遅滞していたり、諸外国のNGOの援助を受けているHIV感染者の中には、団体の方針転換による薬品供給の停止を恐れる者がいたりする。これまで家族間、親族間の問題と捉えられていたAIDS孤児の養育については、国の将来を担う人材という共通認識を構築した上での国家規模での対応が不可欠である。ストリートチルドレンや未就学者、児童労働の増加など、子どもの人権が保障されない現状におけるHIV/AIDS問題は、単なる感染者や患者数の増加によって示される現象では済まされず、国の将来を左右する新たな開発課題を再生産しているのである。

このようなマクロなレベルでのHIV/AIDS問題の解決にスポーツが果たす役割は決して大きいとは言えない。有名スポーツ選手によるアドボカシーキャンペーンを行ったり、オリンピックやワールドカップと言った大規模スポーツイベントに合わせて、各国政府や関連団体に援助増大の要請を続けるしかない。しかし、ミクロなレベルでのHIV/AIDS問題への対応、すなわち個人に対するHIV/AIDS啓発については、様々な意味でスポーツが果たす役割は小さくないと言える。もちろん、スポーツを用いたHIV/AIDS啓発が、全ての国や地域において有効な訳ではなく、スポーツを用いることによる弊害も考慮しなければならない。しかし、スポーツを媒体とするHIV/AIDS啓発が、現場で問題に対峙する人々によって生み出され、世界的に急速に広がっている事実に着目すると、そこに何らかの利点があることは明らかであろう。今後もHIV/AIDS啓発の各段階においてスポーツの果たし得る実質的な役割に注目していきたい。

注

1) UNAIDSとWHO(World Health Organization:世界保健機構)によって示されたデータによる。世界の15才～49才人口に対するHIV感染者数の割合の推定値は、3,160万人から3,520万人の間とされている。
2) 2003年10月にユニセフとUNAIDSにより締結された「AIDS孤児に関する戦略的枠組み合意」に関する発表内でのユニセフ事務局長キャロルベラミーによるもの。
3) IOC, UNAIDS(2005)より引用の上、筆者訳。
4) UK Government(2006)P.9参照。“Mathare Youth Sport Association(MYSA)”が15,000人の少年少女を対象に行った啓発活動が広まったと言われている。
5) ケニアを皮切りにザンビアの“Edu Sport”、ジンバブエの“Sports Recreation Commission of Zimbabwe(SRC)”などに広がりを見せた。ノルウェー政府の開発援助機関や学校スポ

ーツの実施機関が支援し、現在では、トリニダードトバコやジャマイカなどのカリブ諸国、南アフリカやナミビアといった他のアフリカ諸国との連携も開始されている。

6) これまでに「性とリプロダクティブヘルスに関するガイドライン(Sexual and Reproductive Health Guidelines)」、「活動紹介(The Activity Book)」、「指導者のための教本(The Training Pathway)」などがまとめられている。

7) The Kicking AIDS Out Network(2010)のP.25-27、“AIDS vs. Sport”に詳述されている。コメントは、Howells Stefanのものである。

8) Zimbabwe Ministry of Health(2009) “National Survey of HIV and Syphilis Prevalence among Women Attending Antenatal Clinics in Zimbabwe”の資料より。

9) Gregson et al. (2006)は、ジンバブエにおける性行動の変化による新規HIV感染の減少を明らかにしている。

10) Maxwell and Friends Foundation代表のMaxwell Capachawo氏に2011年8月に行ったインタビューより。

11) WHO and GPA(1993)より引用の上、筆者訳。

12) WHO(1992)より引用の上、筆者訳。

参考文献

Batsell, J. (2005), *AIDS, Politics, and NGOS in Zimbabwe,* A.S. Patterson (eds.) The African State and the AIDS Crisis, Ashgate Publishing

Beresford, B. (2001), AIDS takes an economic and social toll, *African Recovery,* Vol.15, No.1-2, pp.19.

Boone, C. and Batsell, J. (2001), Politics and AIDS in Africa: Research Agendas in Political Science and International Relations, *Africa Today,* Vol.48, No.2, pp.3-33.

Bosmans, M. (2006), *The Potentials of Sport as a Tool for a Right-Based Approach to HIV/AIDS,* Auweele, Y. et al. (eds.) Sport and Development, Uitgeverij Lannoo

Coalter, F. (2006), *Sport-in-Development: A Monitoring and Evaluation Manual,* UK Sport

Day School Organization (2002), *Sport & Globalization: The World Cup in South Africa and Beyond Report,* DFID

Delva, W. and Temmerman, M. (2006), *Determinants of the Effectiveness of HIV Prevention through Sport,* Auweele, Y. et al. (eds.) Sport and Development, Uitgeverij Lannoo

Gregson, S. and Gamett, G. et al. (2006), HIV decline associated with behavior change in eastern Zimbabwe, *Sexual Behavior Science,* Vol.311, pp.664-666.

Hearn, J. (1998), The 'NGO-isation' of Kenyan society: USAID & the restructuring of health care, *Review of African Political Economy,* Vol.25, No.75, pp.89-100.

Irurzun-Lopez, M. and Poku, N. (2005), *Pursuing African AIDS Governance: Consolidating the Response and Preparing for the Future,* Patterson, A. S. (eds.) The African State and the AIDS

Crisis, Ashgate Publishing

IOC (2006), *International Olympic Committee Policy on HIV/AIDS,* IOC

IOC (2011), *Fact Sheet –HIV & AIDS Prevention through Sport Update July 2011-,* IOC

IOC, UNAIDS (2005), *Together for HIV and AIDS Prevention –A Tool Kit for the Sport Community,* UNAIDS

Kay, T. and Jeanes, R. et al. (2007), *Young People, Sports Development and the HIV / AIDS Challenge,* Institute of Youth Sport

Kidd, B. (2008), A new social movement: Sport for development and peace, *Sport in Society,* Vol.11, No.4, pp.370-380.

Kirk, A. (2006), *HIV Knowledge in 'Coaching for Hope' Participants, Compared with Non-Participants,* Coaching for Hope Burkina Faso evaluation report

Sherr, L. and Lopman B, et al. (2007), Voluntary counseling and testing: uptake, impact on sexual behavior, and HIV incidence in a rural Zimbabwean cohort, *AIDS,* Vol.21, pp.851-860.

The Kicking AIDS Out Network (2004), *Kicking AIDS Out -Through Movement Games and Sports Activities-,* NORAD

The Kicking AIDS Out Network (2010), *The Kicking AIDS Out Network 2001-2010 -A Historical Overview-,* The Kicking AIDS Out Network

UK Government (2006), *Tackling AIDS Through Sport: A discussion paper,* UK Department of Culture, Media and Sport & UK Department for International Development

UNAIDS, World Bank, UNDP (2005), *Mainstreaming HIV and AIDS in Sectors & Programmes,* UNAIDS and UNDP

UNAIDS (2006), *2006 report on the global AIDS epidemic: Executive Summary,* UNAIDS

UNAIDS (2010), *UNAIDS Report on the Global Epidemic,* UNAIDS

UNAIDS, IOC (2004), *Memorandum of Understanding,* UNAIDS and IOC

United Nations Inter-Agency Task Force (2003), *Sport for Development and Peace: Towards Achieving the Millennium Development Goals,* United Nations

UN Millennium Project (2005), *Investing in Development: A Practical Plan to Achieve the Millennium Development Goals,* United Nations Development Programme

Visser, M. J. (2005), Life Skills Training as HIV/AIDS Preventive Strategy in Secondary Schools: Evaluation of a Large-scale Implementation Process, *Journal des Aspects Sociaux du VIH/SIDA,* Vol.2, No.1, pp.203-216.

World Health Organization (1992), *School health education to prevent AIDS and sexually transmitted diseases,* WHO AIDS Series 10, World Health Organization

World Health Organization and Global programme on AIDS (1993), *School health education to prevent AIDS and STD: A resource package for curriculum planners,* WHO and GPA

World Bank (2007), *The World Bank's Africa Region HIV / AIDS Agenda for Action 2007 -2011,* The World Bank

Zimbabue Ministry of Health (2009), *National Survey of HIV and Syphilis Prevalence among Women Attending Antenatel Clinicsin Zimbabue,* Zimbabue Ministry of Health

稲岡恵美(2005),「貧困の保健学ー貧困とエイズ」, ジェトロ･アジア経済研究所編『アジ研ワールド・トレンド』117号, 36-39頁

鹿嶋友紀(2006),「教育分野におけるサブ・サハラ・アフリカのHIV/AIDS への取り組みーケニアを事例にー」, 広島大学教育開発国際協力研究センター編『国際教育協力論集』第9巻第2号, 71-84頁

勝間靖(2007), 「教育と健康ーHIV/エイズを中心としてー」, 国際開発学会編『国際開発研究』第16号第2巻, 35-45頁

HIV/AIDS Awareness Through Sport: A Case in Zimbabwe and its Characteristics

Chiaki OKADA

HIV/AIDS has been widely recognized as one of the crucial global issues of the last 30 years, and the content of HIV/AIDS awareness programs has gradually been changed. Such programs used to employ an ABC model: Abstain from sex; Be faithful to one partner; and (use a) Condom, but the emphasis has switched to developing a clear and comprehensive understanding of sexual matters, actual changes in sexual behavior, and acquaintance with life skills as goals for HIV/AIDS awareness.

In this current trend, various sports have recently been used as a tool for HIV/AIDS awareness and education. In the trials for HIV/AIDS awareness through sports, we can see several types of approaches, such as 1) awareness relating to sports, 2) awareness on the sport field, and 3) awareness in physical activities. The purpose of this study is to verify the concrete effectiveness of promoting awareness in the sporting fields using a case example of the Zimbabwe Baseball Association (ZBA). I conducted personal interviews with 33 people related to ZBA and carried out field observations in September 2011. As a result, the advantages of the HIV/AIDS awareness program in their baseball clinics are clearly understood.

First, the main purpose of the ZBA clinics is to spread baseball, which is a new sport in Zimbabwe, and the participants in the clinics are always new-comers to baseball. Their ages are usually 13-18 years, almost the same ages as the target groups for the HIV/AIDS awareness programs. Second, the awareness programs are conducted by “close others” who have coached a baseball team for a few days, so that a sense of closeness with the players has developed, allowing for a discussion of HIV/AIDS and sexual matters. Third, as a new game, baseball can attract the participation of more girls than the other sports, because direct physical contact is not required as in soccer or basketball. Finally, the baseball ground under a clear sky provides a relaxing atmosphere in which players may feel enough at ease to talk about HIV/AIDS and sexual matters.

As an awareness catalyst, sports have some unique characteristics. Although we cannot say that promoting HIV/AIDS awareness through sport is always effective for all fields, the worldwide increase in such activities, as mentioned above, shows certain advantages of using sports as an awareness tool. The merits and demerits of using sports to raise HIV/AIDS awareness should be examined for sporting fields besides baseball.